

SR

潰瘍性大腸炎に対する生薬青黛の有用性と課題

○長沼 誠

慶應義塾大学医学部 消化器内科

潰瘍性大腸炎は若年で発症し、再燃と寛解を繰り返す自己免疫性腸疾患である。症状のコントロール不良のために、就業や就学の制限を余儀なくされる患者も多く存在する。治療法の中心はステロイドであるが、ステロイド抵抗性、依存性の難治例が約30%存在し、難治例に対し、血球成分吸着除去療法、抗TNF α 抗体製剤、タクロリムスが使用される。血球成分吸着除去療法は重症例には効果が得られにくい点、抗TNF α 抗体製剤、タクロリムスは様々な副作用、約40%存在する効果減弱例の存在などがあり、既存治療抵抗例に対する治療法の開発が望まれている。現時点では治療薬増量、他治療へのスイッチなどが行われるが、医療費に比して治療効果は限定的である。

近年生薬である青黛が難治性潰瘍性大腸炎の治療としてインターネット情報や口コミにより広がり、一部の潰瘍性大腸炎患者が自己購入にて入手し使用している。しかし、青黛は食品として扱われているため現行の潰瘍性大腸炎治療指針には青黛を含めた生薬、漢方薬の記載はなく、一般医のみならず消化器専門医にも普及していない。さらに安全性に関する検証がないまま投与量や投与期間が患者の自己判断に委ねられているのが現状である。したがって青黛を用いた潰瘍性大腸炎患者に対する青黛の有効性・安全性を科学的に検証することは必要である。

我々は先行研究において青黛の安全性と有効性を科学的に検証するためにカプセル充填した青黛を用いて活動性潰瘍性大腸炎に使用し、約70%で有効であることを確認し、さらに現在難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班のプロジェクト研究として適切な用量を検証するための多施設共同二重盲検比較試験を行い、平成29年2月に試験は終了した。一方で、肝機能障害、頭痛、消化器症状、急性腸炎、肺動脈性肺高血圧症などの副作用の存在も報告されている。本発表では、炎症性腸疾患に対する青黛治療の有用性と課題、副作用に対する我々の取り組みなどについて紹介したい。

SR

青黛摂取に伴う肺動脈性肺高血圧症発症に関する全国実態調査報告

○田村 雄一

国際医療福祉大学 医学部 循環器内科 三田病院 肺高血圧症センター

2011年頃より肺高血圧症専門医のもとに、炎症性腸疾患を伴う肺動脈性高血圧症患者が受診することが散見されるようになり、臨床的には以下の特徴をそなえていた。

- ・炎症性腸疾患患者さんが数か月以上にわたり青黛を摂取している
 - ・初診時は平均肺動脈圧が40mmHgを超え右心不全も伴う重症の肺動脈性肺高血圧症として診断
 - ・肺高血圧症治療薬に対する薬剤反応性は良好であり青黛を中断した後は肺動脈圧が正常化する例も多い
- 当初は散発例の報告のみであったが、青黛はこれまでの治療が奏効しなかった炎症性腸疾患患者に対しての治療法として期待され、臨床試験も行われるようになったため、肺動脈性肺高血圧症の発症に関する現状把握と対策の考慮が急務になっている。そこで日本肺高血圧・肺循環学会・厚生労働科学研究費補助金呼吸不全に関する調査研究班および疾患予後と医療の質の改善を目的とした多領域横断的な難治性肺高血圧症症例登録研究班が合同で、全国の肺高血圧症を診療している医師に対して全国実態調査を行った。本講演ではその結果を公表すると共に、今後の対策について議論したい。